

第4章 教育内容・方法・成果について

1. まとめの方針

2008（平成20）年3月の第3期自己点検評価をベースに、2008年度末（2009（平成21）年3月）に実施された院生向けアンケートおよび2009（平成21）年前期に実施された教員向けアンケート、2009（平成21）年度研究科委員会および（博士後期課程）運営委員会の審議内容、諸規則の変更点を踏まえ、第4期の大学院に関する点検評価報告とする。成果に関しては、新たに、2006（平成18）年度から4年分の進路の集計を加えた。

教育内容については、「教育課程の編成（開設科目）」、「教育課程の構造（体系性及び関連性）」という観点から、方法については、「授業方法」という項目を設け点検・評価を行った。

2. 教育課程の編成（開設科目）

[現状の説明]

大学院造形研究科の教育課程は、武蔵野美術大学大学院規則（以下「大学院規則」）第2条において博士課程とし、これを前期2年と後期3年の課程に区分し、前期2年の課程を（修士課程）として取り扱おうと定めている。また、大学院規則第3条に定める区分（1研究科）に基づき、博士前期課程（修士課程）として2専攻、（博士後期課程）として1専攻を置き、別表1「博士前期課程（修士課程）授業科目及び単位数」、別表2「（博士後期課程）授業科目及び単位数」によって定めている。

（修士課程）は、2専攻14コースが設置され、美術専攻には日本画、油絵、版画、彫刻、芸術文化政策、造形理論・美術史（2008年造形学より名称変更）の6コースが、デザイン専攻には視覚伝達デザイン、工芸工業デザイン、空間演出デザイン、建築、基礎デザイン学、映像、写真、デザイン情報学の8コースが設けられている。

（博士後期課程）は、1専攻3領域が設置され、造形芸術専攻には作品制作研究領域、環境形成研究領域、美術理論研究領域の3研究領域が設けられている。

2010（平成22）年度現在の（修士課程）および（博士後期課程）における履修科目の概要を述べる。

（修士課程）美術専攻の4コース（日本画、油絵、版画、彫刻）の授業科目は、平成22年度には各コースとも4科目開設され、例えば日本画コースの日本画研究I、同II、同IIIのように、○○研究I、II、IIIという科目名で開設され、実技を中心とした制作研究がなされている。単位は、順に8単位、4単位、8単位で、原則として通年、一部2/3年科目となっている。

（修士課程）美術専攻の2コース（造形学、芸術文化政策）および同課程デザイン専攻の8コース（視覚伝達デザイン、工芸工業デザイン、空間演出デザイン、建築デザイン、基礎デザイン学、映像、写真、デザイン情報学）の授業科目は、平成22年度においてコース毎に開設科目数は異なる（視覚伝達デザイン・空間演出デザイン・芸術文化政策・写真・デザイン情報コースでは4科目から最も多い建築コースでは30科目）が、例えば芸術文化政策コースのように芸術文化政策特論I（4単位）、同演習I（6単位）、芸術文化政策特論II（4単位）、同演習II（6単位）のように特論I、IIおよび同演習I、IIの通年科目として構成され、講義と実技によるその発展的演習が内容となっている。

（修士課程）全14コースに共通科目（名称は、○○（特）論、○○研究）が23科目、他コース履修可能科

目として9科目開設され、共通科目内半期科目2科目を除き、すべて通年科目で4単位が配当されている。共通科目は、専攻コースの専門的基礎を拡充する上で重要な科目群となっている。

修了所要最低単位数は、コース別の必修20単位に共通科目10単位を加えた30単位である。(修士課程)の学位論文は、「修了制作」の中に位置づけられ、2年次より具体的な指導が行われる。

(博士後期課程)は、(修士課程)の専攻を統合的に再編し、専門の深化にも対応する教育課程となっており、造形芸術専攻には相互に横断的な三つの研究領域があり、入学時に造形芸術特論(必修2単位)を選択し、造形芸術全領域に通底する課題やその意義を検証し、作品制作研究I、II、環境形成研究I、II、美術理論I、II(各2単位)から4単位分を選択必修、2、3年次には総合研究I、II(各学年2単位、計4単位)を履修し、制作、研究活動について学術的に学び、博士論文の指導を複数の教員から受ける。2010(平成22)年度は、14科目開設されている。

単位取得退学の最低所要単位は、1年次及び2年次に配当された選択科目から4単位及び各学年に配当された必修科目から6単位、合計10単位である。博士号取得のための条件は別に定めるが、論文指導は、2年次開設科目の「総合研究I」、3年次の「総合研究II」の中で、指導が行われる。

以上の科目は、年度毎に、大学設置基準に基づいた「教育課程編成上の基礎条件」(学部同項目参照)として、学部教授会および研究科委員会で確認される共通の基準で単位計算されている。開設科目と単位数の関係等は、本学大学院学則の別表1「博士課程前期(修士課程)授業科目と単位数」および別表「博士後期課程授業科目と単位数」として、本学大学院履修要項に掲載され、大学院学生にはガイドブック、オリエンテーション等により周知されている。

なお、講義系の授業はすべて日本語により行われており、留学生向けの講義科目は開設されていない。ただし、大学院における学修は講義科目以外の演習科目のウェイトが高いため、指導教員による個別対応がなされている。特に交換留学生に対してはチューター制を導入している。また、(博士後期課程)の留学生に対しては、論文執筆の際に、日本語指導を特別に行う体制を整えている。

[点検・評価]

大学院(修士課程)、(博士後期課程)で開設される科目の目標や目標を達成するための開設科目及び計算法は適切であるといえる。ただし、第3期自己点検・評価報告に比して、共通科目開設数の若干の増加が見られる。

次に本学の人的リソースといえる教員が大学院で担当可能な科目を尋ねる設問「14. 問12でご回答いただいた人材を育成するためには、望ましいと考えられる授業科目とその指導体制についてお答え下さい。[①ご自身が担当可能な授業科目、②ご自身の専門領域のカリキュラム、③大学院全体のカリキュラム]」について、回答のあった教員が大学院生の指導可能科目と答えたものを見る。(修士課程)においては、「現在のままでよい」の他、現在開設中の科目やゼミ指導を上げるものがあったが、専攻コース以外の分野からの提案もあるので、①、②を併せて担当可能科目等を一覧したい:(修士課程)については、

○美術系:「絵画一般、絵画技法・材料、絵画技法史」、「版による表現・絵画表現・ミクストメディア表現」、「版画研究・美術研究(実技)」、「経験に基づいた表現論/素材と表現の歴史(19世紀以降)、パブリックアート演習」、「ペインティング、ドローイング、銅版画、パブリックアート、インスタレーション」、「制作主体のカリキュラムは単純が良い」

○デザイン系:「インテリアデザイン」、「環境論・ランドスケープデザイン・建築設計理論」、「ドラマ・映画に関する「作品論」、「脚本研究」、「演技研究」、「演出研究」、「構造計画・日本建築構法史、建築設計」、「色彩心理学、感性工学、認知心理学」、「学科横断的な授業科目、集団による造形と社会参加」、「視覚伝達デザイン基礎(色彩構成、空間構成)。博物館学芸員教育普及ワークショップ。視聴覚メディア論。博覧会展示設計。メディア環境論。アニメーション。映像」、「工業デザイン分野、福祉関連デザイン(バリアフリー、ユニバー

サルデザイン)」、「別の専門分野の大学とのコラボレーションや共同研究プロジェクト。例：ビジネスや工学系の学校」、「世界的な協議事項に関するデザインに関わる問題」をテーマとする授業。

○造形理論・歴史系：「記号論等のテキストの輪読（ゼミ形式）」、「私の専門領域に近い学生がいたら、現地調査などに行きさせるのが一番」、「演習・研究・調査」、「十分な先行研究についての知識と共に最新の研究成果・潮流を取り入れた授業・指導の展開」

○教職・学芸員：「もう少し教育学全体の科目が増加しても良い」

○その他：「オリンピックの歴史、スポーツ・グローバリゼーション」、「洋書講読（但しこのアンケート回答者の専門から選んだ教科書）」、「自然科学系の概論（ゼミ形式）」、「一般的な人文科学系の英語論文の『書き方』」、「アメリカ研究（移民史・文化史・ジェンダー史）、日米関係史」、「論理構成能力を育てる科目の増加」、「学部の学科授業も取れるようにすべき」

（博士後期課程）では、「ランドスケープデザイン（自然と環境と人間について）」、「エネルギー、教育、政治的な方針などの世界的な問題への解決策を見出す国際的な組織との協働」、「色彩心理学、感性工学、認知心理学」、「国際的な組織とのコラボレーションや共同研究プロジェクト。例：ユネスコやユニド。」、「国際的な志願者による調査プロジェクトの批評」、「近代イギリススポーツ史」、「論文講読（より高度なテキスト）」が挙げられている。また、科目ではないが、指導内容として「研究・論文作成・調査・演習」や「論文のためのサポート（個別指導の時間をゆっくりと持つこと）」、「博士論文指導のためのゼミ（集団指導体制が望ましい）日本語文章能力の指導（日本人学生を含む）」、「研究の目的・方法・背景となる考え方、研究の対象を検討・指導する、既存の研究について遺漏なく目を直す事を指導する、資・史料や研究対象の調達、分析方法を検討・指導する、論文の構成を指導する」、「それぞれの分野に於いて自立した研究者として研究論文・発表を通して貢献できるようにするための指導が必要」とする意見があった。

（修士）・（博士後期課程）共通して、「なるべく自由時間を提供し、関心ある領域を広げると同時に深化させる。自らの関心に基づいて自由に学部授業は他大学の研究者とも交流できる環境を作る。発表の場を設定するなどの手伝い」、「大学を挙げて、外部から作家・評論家・キュレーター・ギャラリストをどんどん呼ぶべき。その上で、1対大人数ではなく、少人数の授業でより密度の濃いものにしていくことが重要。大学院だけの特権がもっとあってもいい」とするものが見られた。

システム全体についての提言として、「専門性に対する配慮（他の研究、教育機関の専門家の指導を今以上に受け易くする）」、「大学が開いている全ての学科授業を自分の研究に合わせてとれるようにすべき。また大学院教授をおき、指導だけではなく個人個人の研究に合わせた人的配置が望まれる」や「大学院教授を作る。横断的な指導や領域の中の指導教員の割り振り、学外指導者に対するコンタクト等々を統括する教授が必要」。「デザイナー、博物館、工学、心理学などの他領域とのネットワークを活かした、授業設計。同時に、大学の資産としての記録づくりのシステム化」を述べてもいるが、「交流協定のある海外の大学院のプログラムの参照」や「20歳代後半～30歳代の人に対して、カリキュラムでどうこうできることには限りがある」との意見も見られた。

[将来に向けた発展方策]

第3期自己点検・評価報告で指摘のあった「大学院教育課程の実態に沿った「大学院教育課程編成上の基礎条件」の明文化を研究科委員会で早急に検討することが望ましい。」を2010（平成22）年度中に実現し、その実績を生かして、2011（平成23）年度以降の大学院教育課程編成に繋げる。なお、開設科目数の適正な条件とは何かについての議論も加えられるべきであろう。

特に、（博士後期課程）については、明文化へ向けて、（博士後期課程）運営委員会が責任を持ち、研究科委員会へ提出することが要件となる。

留学生の在籍率が一定以上の割合を占めており、今後もこの傾向は持続されるであろう。従って、留学生への論文指導を含めて、指導担当者から情報のみならず、充実したサポートを目指して、学生生活課や国際センターとの連携による柔軟できめ細かな対応が望まれる。

修士課程が設立されて約40年が経過するが、いくつかの提言にあるように、研究科の制度を体現する独立組織の実体化を狙上に上せる時期が来ており、その組織によるカリキュラムの運営が期待される。例えば、一定条件下で学部開設科目の科目等履修生扱いではない受講可能性の検討等、具体的課題の解決が進められることが望ましい。

3. 教育課程の構造（体系性および関連性について）

[現状の説明]

本学大学院においては、2専攻14コースで構成される（修士課程）と、1専攻3研究領域で構成される（博士後期課程）とでは、専攻や専攻内のコース・領域の設定の仕方が大きく異なっている。

しかしながら、（博士後期課程）における3研究領域には学部や（修士課程）の専攻との関連性があり、作品制作研究領域は（修士課程）の日本画・油絵・版画・彫刻の各コースの分野、環境形成研究領域は視覚伝達デザイン・工芸工業デザイン・空間演出デザイン・建築・基礎デザイン学・映像・写真・デザイン情報学の各コースの分野、美術理論研究領域は造形学・芸術文化政策の各コースの分野を含むものとして構想されている。

このような（修士課程）と（博士後期課程）との関係について（博士後期課程）の立場からは、「（修士課程）とは異なる研究領域の設定により、自らの専門性を再確認するとともに、各領域が相互にオーバーラップしていくことが期待」されるとして、その積極的な意義が『2010年度大学院案内』に謳われている。

本学大学院の教育課程の構造は、造形学部の教育体制を骨格として成立している。特に、大学院（修士課程）においては、造形学部を基礎とした各コースに関する授業科目が置かれ、造形学部の各学科・専攻の研究・制作をより専門的に深めるよう研究指導がなされている。

また、（博士後期課程）においても造形学部から（修士課程）までの教育体制を一専攻に統合したものととして構想・設置されており、本学の有する全学的な資産を活用し、研究教育の指導が可能とされていることは評価できる。また、（修士課程）における共通専門科目の設置など、他の領域からの知識や刺激が絶えず得られる教育体制を取りつつ、学生が自ら選択した各自の専攻分野をより主体的に研究できるように研究科にふさわしい授業科目が配置され、研究に取り組むことができる体制を目指していることは評価できる。

（博士後期課程）においては、1年次にすべての領域の学生が造形芸術特論を履修し「造形芸術に通底するより本質的な課題や、その時代的、社会的意義」（『大学院造形研究科履修要項2010』以下同）について学習する。また1、2年次は各領域の研究科目を履修し、この際には「コーディネータが助言や支援をおこない、必要があれば、他の研究領域の教員からの指導や支援をうけることも」可能である。2、3年次は領域を問わず総合研究を履修し、「制作・研究活動についてアカデミックな視点から指導を受ける」とともに、「複数の教員により、博士論文の指導も受ける」。

3年次、博士の学位を取得しようとする者は、作成した予備論文に対する審査を申請することを始まりとして、課程修了に向けた日程に取り組むことになる。この手順については「武蔵野美術大学大学院（博士後期課程）学位・博士申請の手引」に記載されている。

[点検・評価]

学部、（修士課程）、（博士後期課程）が同じキャンパス内で運営され、教員組織もほぼ重なることから、

学部から（博士後期課程）までの大学としての教育理念の一体性は、実質的に実現されていると考えることができる。

特に、（修士課程）における造形学コース、さらに（博士後期課程）における美術理論研究領域では、造形理論研究に関する専攻の比重が高められており、担当教員の一体性から、体系的と順次性を担保することができ、高度な研究能力の養成が期待される大学院の教育課程に適したものといえる。

【将来に向けた発展方策】

第3期自己点検・評価報告で指摘のあった「（修士課程）と（博士後期課程）とにおける教育内容の関係について、指導を担当する各教育単位で状況を把握し、それぞれの課程の目的の違いに応じたものとなっていることや、一つの研究科としての連続性が保たれていることを点検し、大学院教育に絞り込んだカリキュラム検討の委員会等で適切なあり方について議論していくことが必要である」と述べられたことは、引き続き重要な改善課題である。

しかしながら、各教育単位による点検に留まることなく、システムを運営するという視点で、研究科全体としての検討が研究科委員会及び（博士後期課程）運営委員会の責任で鋭意進められる必要がある。研究科委員会の中に、カリキュラム検討とその運営を行う小委員会を設け、具体的な問題の解決から着手し、実績を積み上げることが望まれる。

4. 授業方法

【現状の説明】

本大学院の担当教員は、シラバス（冊子版及びウェブ版）に授業科目一覧とともに示されている。また、各コース共通科目においては、担当教員による授業概要、到達目標、授業計画、履修条件・履修上の留意点、成績評価の方法、テキスト・参考文献等が、具体的に示され、学生一人一人が各自の研究テーマ、造形美術研究、実践的な創作活動ができるよう留意されている。

本大学院では、各コース（修士課程）の必修科目、共通科目を問わず、専任教員及び非常勤講師により多くの授業で複数指導制をとっている。この場合、講義系科目についてはオムニバス形式で、演習科目については同時複数制が多く見られる。

実際、2009（平成21）年度前期に実施された『大学院についての専任教員アンケート』に基づき、授業形態と指導時間について述べる。

同アンケートの「問4. どのような授業形態で指導にあたられているか」の回答によれば、（修士課程）に関する回答25のうち、約半数が個別指導を主としており、講評や内容によって同一学科教員、他の学内教員や非常勤講師による複数指導を数回併用するという形態を採っている。残りの半数に於いては、集団指導と個別指導が計画的にかつ指導効果を高める目的採用されている。同項目に関して回答のあった（博士後期課程）開設科目担当者および指導教員12名においては、殆どが個別指導を基本としている。作品制作領域では、実技は個別指導、論文指導は定期的に複数の指導教員が集まり、進捗状況を尋ねながら進めている。場合によっては、4年演習や（修士課程）の授業を利用した指導も見受けられた。専門に応じた特別講師の導入がなされている場合もあった。

また、「問2. 平均して毎週何時間指導されていますか。また、その時間で十分と考えるか」という問については、次のような集計結果を得た。

		回答総数	指導時間	回答数	
修士課程	a.充分	4	1～2時間	2	
			3～4時間	1	
			5～6時間	1	これ以上は学生が時間がない。日程が忙しい。
	b.概ね足りている	11	1～2時間	4	
			3～4時間	5	制作期間に入った場合、指導時間が増えるためと、リクエストに応じてその都度授業を行っている。
			5～6時間	1	
			時間数記載なし	1	かなりバラツキがあります（学生の状態や状況によって）。
	c.充分でない	6	1～2時間	2	
			3～4時間	1	
			5～6時間	2	個別対応授業のため、年や時期により変化する。
			時間数記載なし	1	
	回答なし	4	1～2時間	1	授業以外の個別的な面談による指導としては状況による。論文投稿・ゼミ発表直前では指導時間は増えることになる。
			4～8時間	1	
			時間数記載なし	2	専門特論担当のため毎週ではない。
計		25		25	
博士課程	a.充分	3	1～2時間	2	
			3～4時間	1	
	b.概ね足りている	4	1～2時間	2	
			時間数記載なし	2	
	c.充分でない	3	1～2時間	2	
			5～6時間	1	時間ではなく内容としてまだ不十分。しかしDCは本人次第です。
	回答なし	15	1～2時間	1	
			時間数記載なし	14	
計		25		25	

また、「問5. 現在、ご自身が指導されている学生数は何人ですか。また、その人数について適当だと思われるかどうか。適当でないと思われた場合、その理由をお答えください。」の集計結果を一覧する。

	回答 総数	研究指導 学生数	回答 数	その理由	授業担当科目数	受講者数	
修士課程	a.適当	14	1	3名位までは大丈夫。	2	10～15	
			1～2名	1	回答なし	1	1
				1	回答なし	2	講義60、ゼミ18 (学部生等含む)
				1	作品制作(実習)ゼミなので。	1	3
			3～4名	1	学生同志の関係も大切なので複数が良い。	3	6
				1	ゼミであるなら。	1	6
				1	回答なし	2	講義61、演習4
				1	ライバルがいた方が磨き合える。		回答なし
			5～6名	1	回答なし	これ以上はスペース的にも 指導時間的にも無理だから	回答なし
				1	回答なし	回答なし	回答なし
				1	回答なし	4	5
				1	回答なし	1	4
				1	回答なし	担当領域、素材の専門性 に基づく	回答なし
			8名	1	回答なし		10
10名 (ゼミ2、講義8)	1	回答なし					
b.適当 でない	7	0名	1	回答なし	2	のべ25	
		1～2名	1	アトリエスペースの関係で2名としているがもっと人数を増員してほしい。	回答なし	回答なし	
			1	視覚伝達デザインの研究内容は、原理原則の把握から歴史、表現の多様性までの豊富な知見と経験が必要である。ここには「わからないこと」を「わかるようにする」という専門家と普通の人を繋ぐという大きな命題がある。そのために必要な専門性とネットワークの形成など、教員として現状のように学部授業との兼務では時間的能力的な限界があり、少なくとも学科に数名の院生専任教員が必要であると痛感している。	0	回答なし	
		3～4名	1	もっと多い方が授業・研究指導しやすい。	1	回答なし	
			1	もう少し学生を増やして他の教員とのバランスをとりたい。	回答なし	回答なし	
		10名	1	定員に比して自身の担当が多人数だから。	3	10	
		23名	1	集団指導であるが指導者人数が少ない。	回答なし	回答なし	

	回答 総数	研究指導 学生数	回答 数	その理由	授業担当科目数	受講者数		
修士課程	無回答 もしくは、 一部のみ 回 答	4	6名	1	回答なし	2	回答なし	
			10名	1	回答なし	3	25	
			25名	1	回答なし	回答なし	回答なし	
			回答なし	1	回答なし	2	30	
	計	25		25				
博士課程	a.適当	9	1～2名	1	これ以上はスペース的にも指導時間的にも無理だから。	回答なし	回答なし	
				1	他の学生を含んだ指導もあり。	2	1	
				1	回答なし	2	5	
				1	回答なし	—	回答なし	
				1	回答なし	—	回答なし	
				1	回答なし	—	回答なし	
				1	学位取得に向けた指導は大変です。	1	1	
				3～4名	1	ゼミと個人指導なので。	2	4
				回答なし	1	回答なし	回答なし	回答なし
	b.適当でない	0		0	回答なし	回答なし	回答なし	
	担当していない	4		4	回答なし	回答なし	回答なし	
無回答 もしくは、 一部のみ 回 答	12	2名	1	回答なし	2	2		
		回答なし	11	回答なし	回答なし	回答なし		
計	25		25					

[点検・評価]

これらの結果によれば、(修士課程)では、25名の指導時間分布は、指導時間が1～2時間9名、3～4時間7名、5～6時間5名、記載なしが4名である。また、(博士後期課程)担当者の回答では、1～2時間が7名と最も多数である。また、充分であるかについては、指導時間の区分によらず、充分と概ね充分を併せて、(修士課程)では60%、(博士後期課程)担当者では43.8%を占めている。一方、充分でないとする回答では、時間という要因だけではない他の要因が関係することが示唆されているのではないかと。

学生が各自の専攻分野における研究に主体的に取り組み、発展させていくために、(修士課程)及び(博士後期課程)の教育目的に沿って体系的なカリキュラムによる授業が行われている。一方で、各コース・専攻においては、同一研究室であっても幅広い分野、教育内容に対応し得る体制が整っており、各指導教員による授業についても個別的な指導が行われていて、評価できるといえる。研究指導や実技指導の個別的な研究指導は、学生の持つ力を様々な形で発展させ、可能性を引き出す上で重要であり、本学では個別の研究指導を大事に受け止め、継続して努力してきている。

本学の(修士課程)では、ガイドブックにキーワードとして、「美術・デザインの専門領域の総合化」、「総合的な研究力を高める」、「多くの領域に開かれる」、「高い横断性」が謳われている。

「横断性」の一つの実質化は、横断的指導という形でなされる。これを希望する院生の声に対する指導側の認識を検討する。「問9. 3月に実施した大学院生へのアンケートでは、担当教員以外の方にも横断的に指導してもらいたい、という意見もありました。そのことについて、どう思われますか。」に対し、「従来、横断自由としています。」との回答が殆どであるが、横断性の捉え方が専攻に限定される場合が見られたが、「学科内では可能だが、学科外の教員に見てもらおう制度がない」という意見が根拠に考える。しかし、「他学科の教員にもアドバイスを受けている」や「客員教授の学科横断的な指導も行っている」ケースもあり、「メイン担当を決めながら、学生のテーマに応じられる教員がアドバイスを行うことが望ましい」、「いろいろな教員に指導を受けるようにする事に賛成。ただ大学院生なら自らの努力で必要な指導を受ける環境を築くくらいの能力は欲しい。現状でも横断的に指導を受けることはできるはず。それでも、コース間の柔軟な連携の必要性は感じます」と院生自身の意識やコース間のコーディネーションの必要性が看取される意見である。一方で、「理想ですが現実的ではありません」や「修士はセミプロかアマのままかを確認する時期であるので、広く浅くは望ましくない。軸足を定めていく努力をすべきではないか」と疑問視する声もある。

(博士後期課程)においては、主指導教員と副指導教員が制度的に設けられているが、「専門性の向上がテーマなので『横断』は個別でよい」とするもの、「専門分野が境界領域の場合は、他の分野への横断的指導が必要となる」という意見があった。

次に授業の工夫についての設問「問6. 大学院の授業内容について、特に工夫されていることはありますか。」については、(修士課程)では、制作においては「作品に応じて外部の仕事などに参加させている。逆に外部のテーマに応じて作品を作らせている。学外の接点を出来る限り増やすよう心掛けている」、「外での個展を課す。(2年次)」、「定期的な指導以外のコミュニケーションを持ち(例えば課外講座の講師を交えた飲み会等)あらゆる角度から自分の作品を考察してもらいたい」、「作家としての自覚を得るよう、制作作品を多くするようアドバイスしている」、「絶え間なく制作を続けることのために学部の時のように課題を与える」、「他学科研究室(芸術文化制作コース)と展示及びテキストの制作を行う(公開展示・冊子制作)」、「私自身が現在制作の中で考えている事・興味を持っている事柄を学生に投げかけて話し合う」

講義や演習においては、「学生の個性(関心・テーマ)を尊重しながら全員でのディスカッションを積極的に行わせるよう誘導している(教員—各学生の1対1図式が強すぎないようにしている)」、「与えられた授業でなく、自主的・主体的に研究する表現者としての自覚を持つような授業を行う」、「歴史的参照・解釈を常に促す」、「講義科目は多くのコースの学生がいる。前期に基礎となる講義を行った上で、後期には時代・

地域を越えて作品グループ相互の比較を行っている。学生が自身の仕事（あるいは自分の研究対象）と他の作品と比較検討する動機にもなるからである」、「講義：1回毎にまとまったメッセージを伝えるようにし、それらがまとめて全体としてのメッセージが伝わるような講義となるように進めている」、「ゼミ：学生の建築に対する考え方をサポートしつつ、外部の眼から見て、それがどのような建築上の意味を持つかを自覚するよう批判を加えていく。ゼミ内の中だけで使われる言葉とならないように、輪読などを行っている」、「実例を挙げ、出来るだけ活字のみに頼らずヴィジュアルに捉えられる映像を活用して授業を進めている」、「講義形式1コマとゼミ形式1コマを専門分野に関係なくオープンに行い、交流を伴った授業としている」、「論文解析力をつけさせるために、教材選択に時間をかける図書館の利用・文献調査法を、改めて一から教育する」。

学部生との関わりからリーダーシップを獲得するように「今年度より大学院1年生を必修とし、学部生と合同のプロジェクトを実施。院生が主体的に学部生を主導できるよう工夫し、文化政策の実践的なプログラムとして試みている」例や「問題意識の共有を目的に、学部学生との議論の場を用意し、学会や研究所、学芸員など外部とのコミュニケーションを積極的に行っている」例もある。

（博士後期課程）では、個別指導が中心となる中で、「制作意図をよく聞き、学生の立脚点を理解する」、「制作の問題意識をいつも持つように、出来るだけ情報を与えるように努めている」、「独自性を大切に育てること。現代にふさわしい制作研究の中にしっかりとした根幹を持って取り組むこと」を心がけて指導がなされている。論文執筆がどの領域にも課せられているために、「自己の創作について理論的にも分析し制作を進めること。そのための文献紹介など」を実施し、「進捗度を常に確認し、個別に指導する」ことがなされている。また、「制作の度に書くノートを論文のボリュームとする」ことや「造形芸術特論」の中、担当の3回で、作品の特徴＝様式を客観的に文章化するための西洋美術史の基礎的手法を理解してもらうよう努めている」、「外部で研究成果を発表する機会を多く作る」等研究指導が制作と理論の間を行き来できるような工夫がなされているようである。

院生の授業に対する評価を推測する「問7. 先生が担当されている大学院生は授業に対し、どのような感想をもっていると思いますか。」については、大学院担当教員の回答者について次の集計結果を得た。

	選択肢	回答数	比率 (%)
修士課程	a. 満足している	4	16
	b. 概ね満足している	17	68
	c. 不満に感じている	3	12
	回答なし	1	4
	計	25	100
博士課程	a. 満足している	4	16
	b. 概ね満足している	9	36
	c. 不満に感じている	0	0
	回答なし	12	48
	計	25	100

一方、大学院生アンケートでは、「問11.（修士・（博士後期課程）共通）あなたは本学の大学院へ進学してよかったと思いますか。」に対して、次のような回答があった

	選択肢	回答数	比率（百分率）
11.（修士・博士課程の両学生への設問） あなたは本学の大学院へ進学してよかったと思いますか。	a.よかった	32	52.46
	b.まあよかった	14	22.95
	c.どちらともいえない	11	18.03
	d.よいことはなかった	2	3.28
	e.その他	1	1.64
	無回答	1	1.64
		61	100

従って、学生の満足度については、教員の予想と学生の回答はほぼ一致するということができる。

[将来に向けた発展方策]

第3期自己点検・評価報告では、「学生の一人一人への教育研究指導では、個別指導を行う体制が大切であるとともに、複数指導制は学生各自の専門研究を多面的に発展させていくことができる、また、広い視野で多様な角度から研究指導ができる利点がある。指導教員、副指導教員の役割分担を明確にしつつ、連携できる指導体制を維持する。」とあるが、大学院でのFD活動の義務化は、学部のもより早く大学院設置基準第14条の3として2007（平成19）年4月1日に施行されている。研究科委員会等に於いて、大学院カリキュラムや指導体制・方法を総合的かつ体系的視点から検討するしくみの実質化は緊急の課題であろう。

5. 成果

[現状の説明]

本学（修士課程）は、1973（昭和47）年、（博士後期課程）は2004（平成16）年にそれぞれ設置された。（修士課程）修了生は、現在までにのべ1977人、博士後期課程修了者は1人、単位取得退学者は27人。博士号（造形）を取得したものは、2009（平成21）年度末までに3名（作品制作領域1名、環境形成領域2名）である。教育研究及びその成果の外部発信として、学生作品の発表会、展覧会、オープンキャンパスを開催し、また、本学のホームページにおいても、造形芸術の教育・研究機関としての成果を広く情報を公開していることが挙げられる。毎年1月末に、鷹の台キャンパス全体をギャラリーとして、全ての修了、卒業制作及び論文を一般公開するほか、年度当初に（博士後期課程）研究発表展を開催している。

2009（平成21）年度には、本学の80周年記念事業の一環として、東京都美術館で「平成21年度 大学院修了展」が6日間に亘り開催された。これは、大学院（修士課程）の複数コースが参加する合同企画展として、出品学生が主体的に企画・運営を行うものであった。

（博士後期課程）研究紀要の果たす役割にも注目したい。2009（平成21）年度末で第3号となった『（博士後期課程）研究紀要』は、（博士後期課程）在籍者等による研究論文の他、研究ノート、博士論文の要旨等を査読付きで掲載している。要項は（博士後期課程）運営の手引きに掲載され、新入生・進級生対象に開催される4月のオリエンテーション時に案内される。研究論文やノートの執筆を一つの目的として、各自の研究

意欲を高め、自身の研究を客観化する機会となっており、査読による研究内容及び指導の深化が期待される。

[点検・評価]

卒業・修了制作展は、学生や教職員への公開だけでなく、成果の外部評価を受け入れる姿勢を示し、且つ、企業へのアピールの場となっておりその役割は大きい。

個々の指導において、指導担当者が成果発表についてどのように考え、どのような指導をしているのかを、アンケート設問6「大学院の授業内容について、特に工夫されていることはありますか。」から読み取ることができる。(修士課程)においては、「2年次に外での個展を課す」、「『教育学研究ゼミ報告書』を印刷して刊行する(現在第2号)」、「他学科研究室(芸術文化制作コース)と展示及びテキストの制作を行う(公開展示・冊子制作)等、作品を社会的な場で展示する機会を出来る限り多く作る」、(博士後期課程)においては、「制作の度に書くノートを論文のボリュームとする」といった博士論文執筆を意識した指導や「外部で研究成果を発表する機会を多く作る」試みがなされている。

本学が学位を授与する修了生の備えるべき能力や資質、経験について、設問15「学位を授与するにあたり、育成すべき人材像を踏まえ、備えて欲しい能力・意識・経験などをなるべく具体的に挙げてください」をまとめる。(修士課程)における能力としては、「アカデミックライティング能力」、「作家、専門家としての実力」、「ある程度の専門的スキル」、「専門分野の専攻研究を整理した上で、自分の視点を明快にし、そこから結論へ導ける力」、「表現力」他に「語学力」や「コミュニケーション能力」等がある。資質としては、「独立心」、「忍耐力」、「知的好奇心」、「情熱」、意識としては、「学部時代よりも専門的な教育を受けているという自覚と同時に、研究はこれからであり、自分の知識について謙虚であること」。姿勢として、「積極的な研究姿勢」、「継続的に表現を深めてゆく動機がある」、「作家として社会と関わりをもつ」、経験として、「社会を見る目を広く養う」、「様々な展示を見学して、研究会・講演会に積極的に行くこと」、「自ら情報・知識を得る力をさらに身につける」、「研究の基礎となるcourse workを優秀な成績で終えていること」、「先行研究と共に最新の理論も視野に入れた論文を執筆していること」、「研究テーマに関連した専門分野の学会での発表」、「国内外に作品を発表すること」、「プロとしての職務経験」があった。

(博士後期課程)では、「より高いアカデミックライティング能力/発表力」、「後進のものを指導していける技能と知識」、「武蔵野美術大学出身の博士としての制作研究能力」、「研究論文のオリジナリティ」、「作品と制作において、批評性(反批評性)を自覚的・戦略的に獲得する」、「深い研究力と同時に社会に目を向けて広い視野を持ち、自分の位置をよく知ること」、「総合力を持ち、自信を持った人物(意識)」、「学術的研究か作家性かという選択ではなく、批評性を持った作家のあり方を目指す学位授与を期待」、「明確な研究計画を持っている、そして研究計画に沿って論文を執筆し、口頭試問で自分の考えをしっかりと展開・弁護できる能力。研究者としての自覚」、「研究テーマに関連した専門分野の学会での掲載(投稿)論文を執筆できる能力」、「自己の表現を支える専門知識と技術の深化」、「継続的に表現を深めてゆく動機」、「新鮮な創造に資する可能性を持った人材の育成。武蔵野美術大学で学んだ特性を生かし、国際的な視野を持ち、高い意識を持って独自の創作活動に向かって欲しい」のように、能力・資質・姿勢においても、総合的、批判的、客観的に自身の研究を深化させ得る能力が強調され、その過程で広い視野や教育能力、社会性を獲得することが期待されている。

修士・(博士後期課程)に共通して、「自己の表現を支える専門知識と技術の深化」や「自らの足で歩き、自分の目を見て、自ら考えた研究をすること。あとは努力の持続ができる資質。既存の業績を学ぶ姿勢。そして独自のアイデアが搾り出せるかどうか」を求めているということができよう。

進路についての指導教員の考え方は、設問10。「卒業後の大学院生の進路指導について、どのように考えておられますか。」の回答に示されている。(修士課程)においては、「学生によって就職先(就職日程)は

多様、また留学を希望し帰属を決めない学生も少なくない。個別の対応が求められている」、「将来の希望が多様で対応が難しい」という認識の下で、大別して二通りの対応がなされているようである。一つの対応は、「学生の自主性にまかせるべき」に代表され、他の対応は「就職希望の学生の活動に協力する。現実として修了後の進路も含めての個別指導となっています」に代表されるように、「1年次から対応しています。インターシップも含めて」や「卒業生からの情報提供や、希望があれば企業の紹介など行っている」との回答があった。作品制作が中心となるコースでは、「制作環境のアレンジを個別にアドバイスする」など「作家活動のサポートをできるだけしたい」、或いは、「作家活動を継続して取り組むことを根幹として、進路を考えて欲しいと思う」と考えており、デザイン系では、「デザイナー・編集者などの高度職業人。博士課程への進学。」を目指す指導、教職や学芸員の場合には、「セミプロとして活動できる力を持った学生に対しては、後期課程進学または、専門職員（学芸員など）への道を指導する」等、博士後期課程への進学が指導される場合もある。

（博士後期課程）においては、博士の学位が意識されるが、「作家として自立するように（まずは博士論文を書き上げて欲しい）」という認識や「プロとして独立できる手形として、学位取得を目指すさせる」という位置づけをし「それが不可能な場合は専門職員などへの道を指導する」とした回答があり、「博士になった場合はそれなりの就職先や発表形態を整えてやるべきだと思う」と積極的な支援を行うことが必要とする考えや、他分野の博士号取得者と同様に「教育者、あるいは高等教育機関で教員をしながら研究や制作を続ける。デザインの場合には修士と同様の高度職業人も考えられる」との認識を示すものがあった。

修士・（博士後期課程）共通に、入試の段階で「意志の確認が必要である。専門職への就職は難しい」とし、「本人の希望を聞いて、出来るだけ具体的に指導（例えば留学・大学に残る又はフリーで作家としてやってくなど）、現在は個別対応せざるを得ない状況であると思われる。

院生に進路に関する見通しを尋ねた設問では、次のような回答を得た。

27. 進路についての見通しはどうか (複数回答可)。	a. 作家・フリーデザイナーとして活動をしようと思う	29
	b. 希望する進路は見つかると思う	23
	c. 希望する進路は困難だと思う	16
	d. 就職したくない	4
	e. どこへ就職すればよいかわからない	12
	f. まだ考えていない	1
	g. 職場に復帰する	1
	h. 転職する	0
	i. その他	7
	無回答	1

さらに、充実した学術研究環境を形成するために、内外の教育機関との交流について国内外の大学や様々な機関との交流、提携を積極的に推進し、交換教授や交換作品展を始め、一部の提携校とは協定交換留学制度も始まっており、2010（平成22）年度には公益大学との交換留学協定に調印し、2011（平成23）年度から実施されることになった。また、早稲田大学との学術交流や、国際基督教大学、国立音楽大学、東京経済大学、津田塾大学からなる「TAC」など、国内のネットワークにも参画し、施設の相互利用や単位互換制度などが実現している。

[将来に向けた発展方策]

教育単位ごとではなく、大学（院）全体として情報発信の戦略的計画を明確にし、それに沿ったかたちでの外部に向けた発信が必要と思われる。

また、現在、研究支援センターが中心となって展開している産官学共同研究プロジェクトについても、大学院レベルでの受入れの拡充の可能性の検討が必要だと思われる。これを通じて、院生のキャリア形成に資することが期待される。

国際的に通用する教育研究を目指して、国内外の交流レベルを大学院にまで、拡充することも期待されている。